



個性に応じた教育

黒田成子

昨年広島で開かれた日本保育学会の研究発表の中で高橋さやか氏が「幼児教育においては園のカリキュラム」ということがしばしば論ぜられているが、それとともに、個々の子どものためのカリキュラムが考えられるべきである」という意味のことを言われたことは、今なお私たちの記憶にあらたなことである。

「個性に応じた教育」と言えば、とかく特殊の才能をもった子どもが大きく浮かび上ってくるのであるが、実はどんな能力の低い子どもでも、その子どもに特有の個性を持っているものである。このことはあたりまえのことであるがたいへん重要なことであるから、あらためて考えてみたいと思う。

しかし、この三人の子どもの保育は果して先生がいそいで考へついた目標で十分なのであろうか。かりに一人の子どもは大柄の発育のよい女兒であって恵まれた環境に育ち、家庭では近所の子どもを集めてしばしば子ども会などを催し、未知の人ともすぐ友だちになれる子どもであると考えてみよう。もう一人は他園で三年保育の最初の一年をすでに終ってきた元気のよい男児であるとする。この子どもたちは二、三日もすれば園に慣れてしまつて、むしろ他の子どものリーダーとして起用する方が適切であるかも知れない。

三人の子どもばかりでなく、三〇人の子どもがズラッと並んだら、先生は「個」を考える余裕もないであろう。しかし三〇人の一組は三〇人のかたまりではなく、まさしく三〇の「個」が集まつた一組であることに相違ない。

入園当初はたしかに安定感の欠けた者が多いだろうが、子どもによりその不安定の度合にも非常な個人差がある。

一ヶ月も経つと子どもたちの本性が表れてきて個人差が著しく目立つてくる。知的に進んではいるが、行動が鈍く、またたえず先生の目を引きたがる子ども、何をさせてもゆっくりしているが、確かな子ども、新しい仕事には全然手出ししようとする意慾のない者など、さまざまである。

まったく、一人ひとりの個性を作ったもの、また作りつつあるものは何か。それをよりよく伸ばす最良の道は何か。先生はここまで考えなければ個性に応じた教育どころか組全体の一般的な教育もとおりいっぺんのものになりかねない。よく母親たちは「同じ親から生まれた兄弟なのに、どうしてこうも正反対なのでしょう。やっぱり遺伝ですね。」と言う。

たしかに子どもには持つて生まれた素質がある。それは動かすことの出来ないファクターであろう。しかし、この世に生まれ出たときは一個の有機体にすぎなかつたものが、次第に環境とかわりありにおいて、一個の人格に成長発達していく姿こそ、教育の万能性を大きく示すものではないか。

このように子どもの個性は彼が入園する前にすでに形づくられつつあつた。そして今もその過程はずつと続いているのである。ここに子どもの発達歴をよくしらべ、出生以来彼を取巻いてきた

環境が、彼にどういう影響を与えたかをみると意味が生じてくる。この影響いかんにより、子どもは時々刻々起つてくる新しい環境にスムースに適応することも出来、あるいは不適応に陥つ

てしまうこともあり得るのである。

子どものもつ個性、個人差は他との相互関係においてはじめて考えられることである。ここに健全な個性は社会化されていなければならぬものであることがわかる。

たとえ音楽の才能のある傑出した個性をもつた子どもがいても、彼の全人格を育んでいくものは才能だけではない。才能を伸ばす技術的な教育の前に、その子どもが現存している社会に適応していくけるかどうか、自信と安定感をもつて彼の年令相応の生き方をしているかどうかということがまず考えられなければならない。人格の基底をなす、この安定感は「自分はいかなる個性をもっているのか、それに対しても人は何と思っているか」という段階からやがて「自分も自分なりに社会に貢献出来る役目があるのだ」という自覚感に発展していく。こうした沃土に培われてこそ個性は伸びていくことができる。

Aという子どもの持つている情緒は友だちのBに反応し、Bの持つA観となり、再びBよりAに帰り、Aを成長させていく。Aの個性を育くむものは中正な愛情をもつた理解のある家庭生活と、ギヴ・アンド・ティックの激しい集團生活の営みと、そしてこまやかな教師の思いやりある指導によるものであろう。

教師の私たちとはたえずAの諸特長を明確に知り、BともCとも誰とも全く違う彼独特のバタンを見出し、Aの保育に適しいカリキュラムについて考え続けていきたいと思う。